

池袋ウエストゲートパーク SONG&DANCE

原作:石田衣良(『池袋ウエストゲートパーク』文春文庫刊)
脚本・作詞:柴幸男 演出:杉原邦生 振付:北尾 亘

池袋の街を舞台にした 石田衣良の大ヒット小説が、 初ミュージカル化!!



撮影:平岩亨

劇場が居を構える池袋の街を舞台にしたエンターテインメントを生み出せないか——。そんな思いを出発点に、石田衣良の大ヒット小説『池袋ウエストゲートパーク』を題材に、東京芸術劇場は2013年度と15年度の2回に渡りワークショップをおこなってきた。そしてこの度、最初のワークショップから参加してきた演出の杉原邦生(KUNIO)、振付の北尾亘(Baobab)、2回目より参加の柴幸男(ままごと)を脚本に迎え、ついに劇場での公演に挑戦する。時間をかけ、作品を育んできた杉原、北尾の両氏に、公演に向けての思いを聞いた。

杉原 数年前にお話をいただいた時は、まだ実現できるかを模索したいという段階だったんです。ドラマ版のイメージから抜けられるのか自分でも半信半疑ではあったけれど、ひとまずやってみようか、という感じで始めて…。

北尾 その段階で僕に声をかけてくれたんですね。

杉原 北尾君なら一緒に面白いことをやってくれるだろうって確信があった。

北尾 ただ最初の年は、振付の要素をヒップホップに寄せようとしすぎて、形にするだけで必死で…まあもがいてやりました(笑)。

杉原 柴(幸男)君に声を掛けたのは、2度目のワークショップの時。柴君は自分の作品にラップを取り入れたり、言葉のリズムに重きを置いた戯曲を書く人だから、歌に入っていく流れを気持ちいいものにしてくれるんじゃないかという予感があって。

北尾 今となっては、あの時から作品を少しずつ育んできたんだなって思います。

杉原 そうだね。ここまでの時間に、僕らがいろんな現場で蓄積してきた経験

を注ぎ込んで、時間をかけて丁寧に作らせてもらっている感覚。

北尾 自分のなかでも、この数年の間にいろんな舞台をやらせてもらって、ストリートダンスもだし、コンテンポラリーやパレエに関してもいろんな引き出しが増えてたなという実感があるんです。創作への意識も強くなっていて、一つのジャンルに括れない、はみ出したオリジナリティみたいなものを見せられないかと思ったり。

杉原 音楽に関してはEDM(※エレクトロニック・ダンス・ミュージック)ポップスもあれば、これぞミュージカルっていう曲からクラシックまで、いろんなジャンルのものを取り入れているし、作り方も、小劇場的なやり方とミュージカルの文脈で進めている部分がある。この雑多な感じは、まさに池袋の街とも重なる気がして。

北尾 稽古が始まり、俳優さんが動くことで画が立体化され、そこに熱も加わり、そこから受ける刺激も大きいです。

杉原 大野君の素朴で大きな空気の中にある繊細さや、染谷君のまっすぐさや目から放たれるエネルギーの強さとか、矢部君の立ち姿や表情のなかにふと見せる翳りとか…今の時代にも違和感のないマコトであり、キングであり、京一になっているのがすごく良いな、と。

北尾 周りの若者からトップに担ぎ上げられて、否応無しに対立する状況に陥ったキングと京一がいて、そんな彼らの真ん中に気づいたらマコトが立たされている…という関係性が、3人によって綺麗なグラデーションに見えるんですよ。

杉原 孤独を抱えた鏡同士のようなキングと京一の間に、透明なガラスのマコトがいる感じだね。今回、僕はキングと京一の対比もきちんと描きたいと思っています。小さい火種が大きな抗争を生む…それって、いまも、いままでも世界中で起きていることなんですよ。池袋というひとつの街を描きながら、社会や世界を見つめている作品だからこそ、これだけ長い間続シリーズになっているんだと思うんです。(※原作は20年に渡って執筆継続中)

北尾 しかも劇場を出たら、目の前にその舞台である池袋西口公園が広がっているというのも、面白いですよ。

杉原 西口公園は19年の再開発が決まっています。いまの姿のうちに上演するのは最後だと思うので、ぜひ今回観てもらいたいですね。 文:望月リサ(ライター)

～1月14日(日) シアターウエスト

詳細はP9へ

原作:石田衣良(『池袋ウエストゲートパーク』文春文庫刊) 脚本・作詞:柴幸男
演出:杉原邦生 振付:北尾 亘 出演:大野拓朗/矢部昌暉(DISH//)/染谷俊之ほか



関連企画

自作自演

第15回 石田衣良×辻村深月

芸劇+トーク 異世代リーディング

世代の異なる作家が自作を朗読し、トークを行う劇場人気シリーズ。第15回は、今作の関連企画として石田衣良さん自身と、映像化作品も多数の小説家・辻村深月さんが登場!作家自身による「IWGP」の世界もあわせて是非ご堪能ください。

1月7日(日) 15:00開演 シアターウエスト 出演:石田衣良/辻村深月

詳細はP9へ

RootS Vol.05

秘密の花園

作:唐十郎 演出:福原充則

「演劇を続けてみよう」と 思えたのは、唐戯曲との 出会いでした

アングラ世代の優れた戯曲を中心に、
旬の演出家に取り組む「RootS企画」が5回目を迎え、
いよいよアングラ界の巨人・唐十郎の戯曲が登場する。
代表作のひとつ『秘密の花園』に、満を持して挑む
福原充則に、憧れの作品への思いを聞いた。



撮影:西村淳一

好きなものが全部、カチッとハマった

芸劇には「ニッポンの河川」と「ベッド&メイキングス」とふたつの劇団で
登場、今年も赤坂ACTシアターで作・演出した『俺節』が大評判を取った福原
充則。唐十郎作品との出会いは大学時代だった。

「僕は東京工芸大だったんですが、国学院の人と付き合いがあって、その劇
研の人たちが劇団唐組をよく観に行っていたんです。僕は大学から演劇を始
めたのであまり知識もなく、唐十郎という名前を“伝説の偉人”というか“歴
史上の人物”のように感じていたんですが、それじゃあ俺も、と出かけて初め
て観たのが『ジャガーの眼』でした。もう、とにかくびっくりしました」

当時の主流は、今は“現代口語演劇”と呼ばれるようになった“静かな演劇”。
せりふは短く、「……ああ」「っていか……」といったリアリティが反映され、
会話の間は空き、俳優たちはほとんど動かないスタイルだった。

「情報誌のびあで“静かな演劇特集”が組まれて、演劇初心者だった僕は片っ
端から観に行きました。それはそれでおもしろくて、観客として演劇にハマっ
ていくんですけど、演劇とはそういうものなんだと思っていたところに、まった
く違うものが出てきた。それが唐さんの作品でした」

躍動的で詩的な長ぜりふ、理屈では追いかけることができないストーリー展開、思い
もよらないスペクタクルな演出、生活感と妄想が一体化したビジュアルなど、
静かな演劇とは真逆の世界が目の前に広がっていた。

「ずっと映画をつくりたいと思っていた人間が、偶然が重なって演劇をやるよう
になっていたんですけど、続けるつもりはありませんでした。でも“こういう
表現方法があるなら、演劇、もうちょっと続けてみようかな”と思ったんです」

唐のせりふに、無意識に探してきたものを見出したと言う。
「映画の中でも80年代のハリウッドのコメディ映画が好きなんですけど、その
理由が、スティーブ・マーチンなど、『サタデーナイト・ライブ』(アメリカで1975
年から放送されている深夜のコメディ・バラエティ番組で、多くのコメディアン、
俳優を輩出している)に出ていたスタンダップコメディ出身の俳優たちの喋り
なんです。それとR&Bが好きで、ライブ盤をよく聴いていたんですけど、ジェイ
ムス・ブラウンとか、曲と曲の間とにかくよく喋るわけです。つまり“リズムに

乗ったひとり喋り”が大好きで、それを芝居で成立させるのはどうしたらいい
のかずっと考えていた。唐組の芝居にはそれがあって。泥臭い雰囲気なんか
とも合わせて、好きなものが全部カチッとハマったんです」

ヒロイン・いちよには女性のすべてが入っている

数ある唐戯曲から『秘密の花園』を選んだのは、最も共感できる唐作品だっ
たから。

「雲の上を見るようにして観てきた唐さんの芝居の中で唯一、登場人物の中
に自分がある気がしました。主に女性像だと思うんですけど、寺島(しのぶ)
さんにやってもらって、いちよという役は、男から見た女性にまつわるすべてが
入ってるようで。恋人であり、姉であり、不倫相手であり、でも肉体関係がない
処女性があり、魔性の女であり、あげくにどこまで現実なのかわからない。そ
ういう感覚を、この戯曲を使って自分で出してみたいと思ったんです」

寺島演じるいちよもろはに振り回されるアキヨシを柄本佑が演じるが、
これは初演時、柄本の父である柄本明が演じた役でもある。
「最初、それを忘れていたんです。シンプルに“どこか土臭くて、振り回される
のが似合って、生活感があるセットに座っていてもどこかに狂気がある人”と
考えていたら、パッと思いつきました」

田口トモロヲは「ずっと一緒にいたかった役者さんのひとり」、他のキャストも
「過去に仕事をして絶大な信頼を置いている人」と、理想の座組が実現
した。ただし稽古は「解釈が役者さんごとにバラバラになりそうな戯曲ですし、
理路整然とした人、わからないことを楽しみながら演じられる人がある
と思うので、そこを見極めながら進めたい」と心境を語った。美しく激しく
儂いラブストーリーに、どんなリズムをつけるのか。目をこらし耳を澄ませて
初日を待ちたい。

文:徳永京子

1月13日(土)~2月4日(日) シアターイースト

詳細はP10へ

作:唐十郎 演出:福原充則

出演:寺島しのぶ/柄本佑/玉置玲央/川面千晶/三土幸敏/
和田瑠子/福原充則/池田鉄洋/田口トモロヲ

チャレンジふくしまフォーミングアーツプロジェクト
ふくしまの中学生によるミュージカル創作・公演

タイムライン

作・演出：藤田貴大 音楽：大友良英

ミュージカル 『タイムライン』への 誘いと合図

いつもと変わらない朝、変わらないおはよう、
変わらない授業、変わらない夜、
でもその夜に、川が流れていたら。
川をたどるなら。誰かとたどるなら。せーの！

地理の時間

ミュージカル『タイムライン』に乗るにはどうすればよいか。まず、川から始めよう。近くに川はあるか。どんな川でもいい。『タイムライン』を見る前に、川をたどっておこう。時間があるなら、その川沿いを歩いてみよう。休み時間、休みの日、あるいははずる休み。ほんの少し、もう少し、あるいは海にたどりつくまで。どうしても時間がなければ、地図を広げてもいい、自分の住んでいるそばにある小さな流れが、どこにつながって、どんな海にたどりつくのか、その地図の青い広がりまでたどるだけでもいい。

これだけでも『タイムライン』の「ライン」をたどる準備はできた。

土地の名前

たどった川のイメージを使って、どこか知っている土地、知らない土地の地図を眺めてみよう。たとえば「ふくしま」。「ふくしまの中学生・高校生」の、「ふくしま」。ふくしまにはどんな川が流れているか。それは福島という街をどんな風に横切っているか。あるいは、この劇のワークショップが行われた街、郡山、会津若松、福島、いわき、白河。これらの街の川はどこからどこへ流れていくか。この劇は白河と東京で上演される。白河から東京までに、わたしたちはいくつの川を渡るか。

川は流れ、溢れ、土地を削り、土砂を運び、その川の作った土地に人は道を作り、鉄道を敷き、学校を建てる。だから、白河から郡山、郡山から福島をたどるとき、川を見逃さないで。会津若松から思いがけない場所へ注ぐ川を見逃さないで。「あ」から始まる川、1時から始まる眠れない夜、宇宙に浮かぶ気球、円を描くマスゲーム、音楽、川、記憶、下る、気配、声のタイム。



撮影：石川直樹

予想と逸脱

これで『タイムライン』に乗る準備は整った。あとはこの、あらかじめ整えられたタイムラインから、逃れることを怖れないこと。あらかじめの予想から逃れることを怖れないこと。誰かが予想するさまざまなタイムライン、藤田貴大という名前から予想する、『マームとジプシー』のあの身体動作の繰り返しもたらず高揚、大友良英という名前から予想する、美しいメロディと即興演奏、石川直樹という名前から予想する、山を越え海を渡る冒険とその記録、ふくしまということばから予想するあの日のできごと、『タイムライン』はそのいずれにも関係があるけれど、そのどれでもない。

中学生・高校生？

劇は、ワークショップに参加した中学生・高校生によって作り上げられている。そして出演している彼らは確かに中学生らしさや高校生らしさを帯びているけれど、酒井幸菜によるめくるめく縦横無尽の振付によって踊り、歌い、叫び、演奏するその姿に、見る者は「中学生」「高校生」ということばが予想させる身体とは全く異なるものを見出すことになる。そして、そこには脚本も演出も譜面もあるはずだけれど、お互いの次の一步に耳を澄まし、次の足どり、次の音を瞬時に変化させる彼らの動きを見るうちに、これは、あらかじめ仕込まれた時間や場所よりも、もっと遠くに行く劇だということに気づくだろう。劇中で投射される幾多のスナップ写真は、出演者自身が撮影したもの、それらは、繰り返し強めに押されていくシャッターのように、そして彼らの次の一步、次の一音のように、この劇の時間を刻んでいくことにも、気づかされるだろう。

これからすべきこと

何よりもまず、舞台上に駆けつけよう。

訪れた者は舞台を横切ることを許されている。劇の前、あるいは後に舞台を踏んでみよう。そこには奇妙な図形が描かれている。劇は、出演者たちがその図形を踏んでいくことから始まる。その図形が意味するものが何か、その意味が劇のなかでどう変化していくか、知っている土地、知らない土地の川をたどったことのある者なら、わかるはずだ。劇が始まる。はじまりの合図は「せーの！」

文：細馬宏通(研究者/人間行動学)

3月29日(木)～31日(土) シアターイースト

詳細はP14へ

作・演出：藤田貴大 音楽：大友良英 写真：石川直樹 振付：酒井幸菜 衣装：スズキカユキ
出演：ふくしまの中学生・高校生 監修：平田オリザ 記録映像：高見沢功

「チャレンジふくしまフォーミングアーツプロジェクト」とは、県内の中学生・高校生が、プロの演劇作家、音楽家等と共に時間を過ごし、ミュージカルの創作・公演を行い、チャレンジする中学生・高校生の姿を県内外に発信する、福島県主催のプロジェクです。2015年度よりプロジェクトがスタートし、今年で3年目を迎えます。

撮影：石川直樹